

# センター のびん



## ひと言

### 大谷海岸から

熊谷富代子（センター運営委員）

ローカルなことを書く。

2012年5月。大谷海岸近辺のあちこちに菜の花畑が出現した。瓦礫が片づいた跡地、道ばた、耕作地跡。菜の花畑が被災地の新しい景色を作っていた。自然の再生力の強さを思うとともに震災前の姿には戻らないとも感じた。環境に適應できる種が生き残っていく。しかし人間はそうはいかない。

昨年、沿岸部の田畑は瓦礫と塩害で殆ど耕作できなかった。大谷小中学校の「冬水田んぼ」も津波被害を受けたが、田んぼの塩分を水で洗い流す作業をし、米作りをした。中学生が中心になり小学生も川からの水運びを手伝った。農家の支援を受けてだろうが、先生方も大変だったろう。瓦礫の散乱する田んぼが周りに広がる中で、狭いながら青々と苗の育つ学校の田んぼを見ると気持ち晴れ晴れした。校庭の仮設住宅に移り住んだたくさんの人々や農家の人々も元気づけられただろう。子どもたちと先生たちの頑張りがこの景色を作り出し地域に元気をもたらしたことは確かだ。この地域の未来は？

気仙沼も放射能による汚染の心配が高まっている。学校の田んぼは大丈夫なのか。生活再建の背後に放射能への不安がつきまとう現実への適応は難しい。「日本は一つ」。誰もが考えてほしい。

## 目次

ひと言	熊谷富代子	1
3・11が気づかせたこと	太田 直道	2
シンポジウムの報告		7
震災を通して考える 地域と学校	制野 俊弘 高橋 満 田中 孝彦 本田 伊克 秋永 雄一	
ブックレットを読んで 戸倉に行かなければ!	山本 明德	17
教室の報告		
元気な5年生との2か月	千葉 政典	20
66号別冊を読んで 子どもの心に寄り添う教師の姿に学ぶ	佐々原和子	22
「子どものことばに耳を傾けなくてはい」と考える	千葉 早苗	23
本の紹介		24
センターの動き		24

# 三・一一が気づかせたこと

太田直道

原発の再稼働にしがみついている人びとがいる。まるで何ごともなかったかのように、事件はもう終わったかのように、「以前の状態」以外に生きる道がないかのように。ああ、この人たちはまだ何も気づいていないのだなと思う。気づくためには、事実をたいする謙虚さが必要なのだが、この人たちにはそれが少し欠けているのだろう。彼らの額に痛々しい文字が浮かぶ——わが亡き後に震災は来たれ。

## 警告

三・一一は私にある覚悟にも似た想いを与えてくれたように思われる。津波による沿岸部数百キロに及ぶ壊滅と原発事故による東日本の広域に及ぶ放射能汚染とは、これからの災害が自然の猛威と人工の破局という二重の災厄になることを、われわれの前に見せつけた。悲劇の苦しみには彼我の差はないが、後者は人間自身による歴史的犯罪行為であり、子孫への殺害行為であるために、漆黒の苦しみを与えるのである。原発事故は、おぞましい悪業の炸裂であり、近代社会の末路の黙示である。われわれはその状況を前にして、原罪の自覚にも似た想いに打たれ、人間存在の宿業におのかざるをえない。フクシマから発せられたものはたしかに「漆黒の光」ではあるが、この光は、それなしでははてしなく滑り落ちてゆくわれわれを、その痛覚によってわれに返らせるような、閃光であった。

われわれの落下とは何だったのか。技術への盲信と近代社会の虚構への無批判な安住である。今回の出来事は、近代経済社会はもう終わりにしなければならないというメッセージであるが、このことに人はどれほどの注意を傾けて受けとめたのであろうか。いま、われわれは技術と産業のあり方を根本から問い直さなければならぬのだが、そのような反省はなかなか拡がらない。近代の騒音にかき消されて、人の耳に届かないのである。



もつともこのメッセージはすでに、二つの世界戦争と全体主義がもたらした惨状によって、また原子爆弾の炸裂によるヒロシマとナガサキの焼尽によって、すでに繰り返し送り届けられていたのだが、やはり聞き届けた人はあまりにも少なかつたのである。

### 分離の末期

わたしは、三・二一が「人間の分離」についてのある根本的事実から生じたのだと考えている。今回の出来事の根底に「分離」の問題があると考えるのである。分離とは、あらゆるレベルでの切り離し、断絶、選別、特権化の総称である。分離によって科学は発展した。科学は事物の分析（分離）をどこまでも追い求めることによって自然を諸部分に解体し、専門的な、閉鎖された枠組みに嵌め込み、一義的な解によってものごとの決着をつけていくからである。いわば現代文明は分離の魔術によって操られた世界なのである。なかでも最大の分離は自然からの人間の分離である。人間は自然そのもの、ありのままの世界から切り離されて、自分勝手にふるまいだしたのである。自然界のいつさいは分離しない。分離は不自然であり、反自然だからである。分離は、しばらくは利益を生み出すようにみえるが、必ずしっぺ返しを招く。とりわけ、人間は、自然とのつながりを断ち切り、利用の対象としか見ることができなくなつてからというもの、利己的となり、生存の地盤を掘り崩しながら生きなければならないという時代を自ら招いたということをし、いまわれわれは心にとめなければならぬ。

分離があらゆるレベルにおける差別化であるとすれば、それを克服する唯一の力は、「結合」である。自己本位にならず、他人と想いを一つにし、人びとが輪を結んでいけば、勝手な行動は生まれず、争いは起きない。社会のあらゆる矛盾と対立は分離的な自己本位から生じる。分離は一部のものに排他的な特権と利益を得させる。切り離さなければやっていけないものは、必ず弊害を生み、人間にとって不幸と責め苦の種となる。原発は、運転中の本体も、放射性核物質の管理も、その廃棄物も、まして事故の結果大量にまかれた放射性物質もすべて、分離の極みとなるものばかりである。原発は、人間がみずから近寄ることのできないものを造りだし、人間社会のただなかに投げ入れるという、暴挙の産物なのである。

### 「識者」たちのつぐまき

三・二一以降、多くの論者があらゆる場で、あらゆる見解を述べている。この一年余、三・二一を「思想化」するさまざまな発言もなされてきた。三・二一がなにかの始まりであることを察知する識者たちがいる。しかし、彼らもまた、何が変わったのか、何が始まるのかを伝えてくれない。その多くは現状にたいするたんなる憂慮と怯えにも似た感想にすぎないが、なかには状況を言葉にし、本質をとらえようとする真摯な試みも散見された。しかし、なぜこのような「終末論的」状態が生じたのかについて、根本的に考えようとしたものは容易に見当たらない。それらもほとんど心情的なレベルにとどまり、原因への思索にいたっていない、という思いを禁しえないのである。

近代の技術が非人間的な方向に向かっていることは、一般的には夙に指摘されてきた。しかし、「技術は、人間の思惑などは無視し



て、自己運動し自己展開するものらしい。技術の論理は人間の論理とは異質なものの、何か不気味なものだと考えて、畏敬しながらも油断しない方がよいと思うのだ」とか、「これから人間や人類は危ない橋をとぼとわたっていくことになる」というような少し寝ぼけた発言に、心優しい日本人の悲哀を感じてしまう。

これまで安定的に支配してきた根拠が動揺し、カオスの世界が出現したとする見解がある。逆である。これまで世界は偽根拠に踊らされてきたのだが、その偽根拠の化けの皮がはがされたのである。本来の自然の「根拠」がむき出しの形で露わとなったのである。また、「火薬庫の上に鎮座している日本列島の姿が浮かぶ。……もつと巨大な地殻変動、天象異変の、ほんの先触れの震動を表しているにすぎないように思えてならない」という指摘も、まったくそのとおりだと思うが、わたしにはこのことは子どもたちにも周知のことがらであり、その先を語ることが思想家の務めであるように思われる。

また、成長神話を捨てること、日本の経済復活を論議ではなく、世界の一員として、世界全体の問題に取り組みべきことを指摘する論がある。原発事故は、資本主義的世界が解体し、地球的時代が到来したことの象徴だということである。また、原発の安全神話を告発する論にはいとまがない。原子炉は無謬、無尺蔵だとされ、神格化されてきたことを告発するのである。また、今回の事態が天災と人災の究極的融合であることに注目し、それを「地球高温化」と呼んだ論者がいる。このことによつて歴史がそれ以前と以後とに分かれたれ、人間は「それ以前」から切り離された「それ以後」を生きていかななくてはならない、という指摘である。

これらの意見は、それぞれにポイントを衝いているであろう。誰もがほぼ一致して近代の状況に不安を覚え、その存続に疑問を投げかけている。三・一一が投げかけた問題のスケールの大きさが実感させられるのである。それにしても、近代技術にたいする潜在的不安感をもとも人びとのあいだに強くあつたのだということを見出し、ある種の安堵を覚えたのはわたしだけであらうか。

### 必然性を知ること

この世界のすべてのことは、必然的な結果である。起こつたことは起こるべくして起こつたのであり、起こらないわけにはゆかなかつたのである。もちろん、この東日本大震災も、そして、それに伴つて生じた原発事故も偶然ではない。

必然とは、ことがらの全体的脈絡のことをいうのであり、たんに物理的なことに限られるわけではない。すべてのものごとがつながりあつており、調和を結んでいる。それが宇宙の秩序であり、「大いなるもの」の存在の仕方である。この「大いなるもの」を見失い、軽視してきたことへの報いが、今回の原発事故だつたのではないか。

われわれは、この大きな必然性に合致した生き方に変わらなければならない。漱石は則天去私を晩年の銘としたが、いまわれわれは、彼が思つたような自己の心境としてではなく、人間の全体的な生き方としてこれを掲げなければならないだろう。必然性はひとつの大きな流れであり、そこには枝分かれもなければ、区別も分離もなく、原因と結果の違いもない。すべてのものはこの大きな流れのなかで、流れとともに生きてきた。ところが、人間の文明、とくに近代文明だけがこの必然の流れから飛び出してしまったのである。ものごとは、一方の方に傾きすぎると本来の状態に戻らうとする。そして秩序が回復される。一方の側に傾いたまま、ものごとが

終わるといふことはない。明らかに今回の出来事は、近代文明が無謀な人為の方向に傾きすぎてしまったことの反動として、そして人間が自然から乖離し、自らの技術に驕り高ぶったことにたいする警告として生じたのだといわざるをえないだろう。現代の人間は、見えざるものを軽視してきた。見えぬから存在しないのだと不遜にも考えてきた。それどころか、見えないのをよいことに、親に隠れて非行に走る少年のように、やつてはいけないことに手を出してしまった。人間を育てた見えざるものは普段はやさしく見守っているが、人間の不遜な行動にたいしては容赦なく叱責するのである。

原発が咎められなければならないのは、その開発、運転、廃棄物処理、廃炉、事故のすべてにおいて、いのちへの侵襲のリスクから逃れられないからである。原発問題の本質は、それがいのちの原理と一致しないということにある。いのちはたんなる身体的な生命に終わらない。いのちは心臓の鼓動であるとともに魂の鼓動であり、それは自然の鼓動に共鳴し、他のいのちの鼓動と融合しないでは生きていけないものである。この点を忘れたままで対処するかぎり、原発問題は解決しないであろう。

いのちと魂と自然は一つの輪を形成している。原発事故は、この輪を断ち切る。原発事故のもつとも罪深い罪状は、いのちと魂と自然のつながりを破壊したことにある。近代文明はこのつながりの欠落のもとに発展してきたのであるから、今回の事故はその決定的な帰結だといわざるをえない。その近代文明の頂点に核エネルギーの利用があり、あらゆる戦争兵器の開発があり、生命操作の技術がある。それらが人間のいのちにたいする無知と忘却でなくて何であろうか。

### 原発、それとも愛

彼らにはいのちの本当の意味が分かっていない。いのちとは輪なのだ。目に見えない無限の輪の連なりが全体世界に漲り、巡っているのである。輪がつながり、全体の回転をうながすこと、それが愛のはたらきである。いのちがつながりあい、すべてのいのちが「ひとつである」との想いがもう少し人の心に育つていけば、これほどの悲劇は起こらなかつたであろうし、これから予想されるいつその悲劇も回避されるであろう。分離の反対にあるものが愛である。分離は他者の排斥であり、愛は他者との結合である。愛によってのみ、すべてのものが繋がり、いのちに生気が蘇ることができる。

万物のつながりの場は大地であり、すべてのいのちを育むものは大地である。大地とは最高度に複雑な生命の生存の場である。森や里山や海洋は生命多様性で覆われ、生命のシンフォニーを奏でている。人間はこの多様な場に身を置くととき、安らう。そのときの安らうとは、すべてが融けあい、おのれが生かされるものによつて生きていくという充足感である。この思いが愛の感情に他ならない。自分が愛されていることに気づかない人は人を愛することができず、すべてがつながりあっていることを知らない人は分離が世界のすべてだと思ふ。原発問題の根本は愛の欠如にあるのだ。



彼らは愛を経験したことがなかったたのであろうか。あわれな亡者たちよ。これまで亡者は自ら苦しんでも、万人を巻き添えにすることはなかった。愛を知らぬものが力をえるとき、そこにすべての悲劇の始まりがあるのだ。いまからでも遅くはない。愛を想え、亡者たちよ。そうすれば少なくとも再稼働のボタンにさし込まれた手を引込めるであらう。

### 気づき

それゆえ大切なことは、どのような生活においても、人間関係においても、あるいは運動においても、「あなた」と「わたし」を切り離さないことである。あなたとわたしを分離し、わたし本位の利得をすべてだと思ったところから、人間の対立が生まれ、悲劇が始まる。あなたとわたしを分離してはいけない。一つの同じ魂であるとの想いだけが未来を呼び寄せることができる。分裂に見えるものが本来はつながりあっていることを知ること、このことが一番大切なのである。現実の分裂は、この大切なことに気づかせるために人類に与えられたレッスンのかもしれない。

人間を分ける嗜好、自分を他人にたいして特権化し、他者のいのちを自分に結びつけることのできない心が、この社会を苦界にするのである。分離の行き着く先が戦争に他ならない。それゆえ、戦争をなくそうとすれば、なぜ戦争があるのかを考えなければならぬ。そして、自分の心のなかにある分離が、戦争に立ち向かうことを妨げていることを知らなければならぬ。自らの内なる戦争をみつめること——このことが現実の問題を真に解決する唯一の方法でないか。そして、人はこのことを愛によつて学ぶのである。いかなる場においても他者を、そして自分のなかの対立するものを包みこむこと、「輪の論理」を見いだすこと、このことが愛の学びであらう。

倫理学は「善いことをする者にたいして、善いことをお返しする」ことに徳の原理を見いだすが、イエスは「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか」という。愛は無償の放射であり、相互契約ではないのだ。このことは、社会における他の一切が互恵の原則によつて動いているのにたいして、愛のみが有する際だった性格を言いあらわしている。味方を愛し敵を憎むことは真の愛ではない。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と、イエスは教える。これほど大きな教えがあるうか。愛はこの高みを要求するがゆえに困難であり、稀有なのである。いま、われわれはすでに起こった原発事故のただなかにいる。憎悪の想いはこれからますます昂ぶるであらう。しかしそれでは問題が解決しないことを、愛の思想は教える。稀有であつたものがこれからは浸透しなければならぬのである。

この社会はわれわれの心の鏡であり、自ら望んだものがそこに映し出される場である。そのとき社会は人間的であり、善きものである。いま、目の前の社会がどのようであるかを問うとき、われわれはまず自分の心のなかを見つめるべきであらう。社会を変革しようと思えば、まずおのれの心を変えなければならぬ。いま自分の周りで起こっていることが、おのれの心のうちにもあるということに気づくことが、われわれの出発点なのだ。

# 震災を通して考える 地域と学校

最近、石巻最大2000世帯の集まる仮設住宅団地に立った。真昼時だったがどこにも人影をみることができなかった。家にこもっている人も多いのだろうか。抽選で入居が決まったことを聞き、市内のあちこちに在籍するであろう子どもたちの登下校はどうなっているのだろうかと気になった。

3・11は津波被災を直接受けた沿岸部だけでなく内陸部までの生活を誰も想像できないほど大きく変えた。

シンポジュームの始まりのあいさつで中森代表は、「日本の学校には『母校』という言葉が死語になったのではないかと言われるくらい、学校というのが単なる通過点の如くなっているという状況の中で今回の『3・11』という状況が生まれた。その3・11を体験する中で改めて地域と学校という言葉が私たちの非常に切実な問題として今浮き上がってきていると言える。『地域』にとつて『教育』とは『学校』と

は何なのか、『学校』にとつて『地域』とは何なのか。『地域』で営まれている暮らし・生活、それから『学校』で営まれている教育を私たちがどう深めていくかが今日のテーマだと思っている」と話した。

個々の「地域と学校」を取り上げるのではなく、中森の言うような深め方ができれば、そこをベースに直面する個々の場合のべき姿も見えてくるのではないかと考えた。

会は考えるように深めきれなかったが、このシンポを足場にその深め合いと具体的な動きがつけられていき、次はそれぞれの「地域と学校」についての動きの交換ができればと思っている。紙数の関係で、この会の報告も、パネリストの最初の発言要旨が主にならざるを得なかったが、この報告が一人ひとりに「地域と学校」を考え深めるものになることを願っている。

(かすが)

パネリスト

制野 俊弘さん(鳴瀬二中)

高橋 満さん(東北大学)

田中 孝彦さん(武庫川女子大学)

本田 伊克さん(宮城教育大学)

司会者

秋永 雄一さん(東北大学)

制野俊弘さんの発言

たん休憩。後半の方はパネルディスカッションと会場の方のご意見・ご質問などを受ける形で議論を進めていきたいと考えています。

いうことだったので書いてもらいました。その頃になると、書きたいっていうか、書き残さなければならぬと思ったみたいで随分いろんなことを書いてきました。その一例を紹介します。

(資料1次頁下 康生の作文を読む。)

秋永 このシンポジュームについて、進行の段取りだけ簡単に紹介します。前半と後半に分けます。途中で少し休憩を入れます。前半ではパネリストの方4人、制野先生の方から順番にそれぞれ20分でお話しいただきます。そこです



間もなく1年という今年一月に、部活の子どもに「震災の時にどういこうとあつたか書ける？」って言った「書けます」って

間もなく1年という今年一月に、部活の子どもに「震災の時にどういこうとあつたか書ける？」って言った「書けます」って返すようなことも聞けませんし、「これやって頑



張ろう」なんて軽々しく言えないです。暗い心を引きずってますので。ここをどう乗り切ったのかということの後で具体的な実践で紹介したいと思います。運動会の実践です。

地域が殆ど壊滅状態です。全校156名中亡くなった生徒3名、亡くなった保護者10名、被災率82・5%。それから現在でも仮設から通っている子どもたちが70%近くおられます。全校156名だった学校は今104名、約三分の二に減っておりますので、大事な友達なんかも転校していくというふうな状況でした。こういう状況だからこそ運動会、学校行事とかですね、私体育教師なんです、体育以外の体育的行事でなんとか学校と地域を結びつける、あるいは、地域があるから学校があるんじゃないかと、学校があるから地域があるんだって、逆の発想でもって何とか運動会で地域作りができないかっていうふうなことで、八月の末に運動会に取り組みました。

目的は三点、人間・学校・地域の再興、復興の場に位置づける。その為の企画を立案する。それから、将来この地域を担っていく子どもたちです、子どもにも自治と共同の力を最大限発揮させ、将来の地域再生力の根っこを耕す。もう一つは、離ればなれになった地域の方々の再会の場とするというふうなことです。この三点でもって運動会をやっています。プロジェクトで写真を提示しながら話を進める)

子どもたちといろんな企画を練ったわけですが、子どもたちはいろんなことを考えました。入場行進どうするんだと言ったら、「馬で入場行進

したい」って言うので、急遽馬を手配し、実行委員長とか生徒会長とかが馬に乗って入場するんですね。堂々と入場するわけですが、非常に壮観な風景でした。馬を二頭借りました。

火の神です。子どもたちが何か復興の証を立てたいと「聖火リレーをやるよ」ということになったんですね。聖火リレーの火は「火をおこそう」ということになった。それで当日火起こしから始まります。全校生徒の前で、父兄が周りを囲んでいるわけです。練習の段階では半分つかなかったので、つかなくなったらどうしようと思ったのですが、(火起こしの様子の写真を示しながら)こうやって一生懸命にやるわけですよ。地域の人たちがリレーをして最後に生徒会長が火をつけるという聖火リレーです。火がついた瞬間にパパーンと花火を打ち上げました。次はそのときの作文です。

私は火の神から炎がおこるシーンが心に残りました。……火がつくとともに、頭張れと心の中で何回も思いました。そして灯が灯った時、これは津波の犠牲者と私たちの希望の炎、希望の光なんだと思いました。……この運動会にはちゃんと意味があるのだと思いました。運動会の最後の紙飛行機を飛ばしたとき、生き残った自分たちは亡くなられた方々の分まで精一杯生きようと思いました。

#### \*資料「康生の体験から」

3月11日。僕はあんな日が来るなんて信じられなかった。今でも。あの日、先輩方の卒業式でした。午前で学校が終わった僕は、優太と敏雄と巧斗と遊ぶ約束をし、家に招きました。住み始めて四ヶ月くらいの新築の家で、来たがっての友達もたくさんいました。あの四ヶ月は父と母と三人で幸せな時間でした。

「おじゃまします」と声が聞こえ、三人の友達が入ってきました。その日の卒業式の話をしたり、とても盛り上がりつつありました。二時くらいになって敏雄が「お菓子買に行こう」と言うので、近くの立石商店へ歩いて行きました。そして、店へ足を踏み入れた途端(分タガタガツ)と大きな揺れが起こりました。立っていらなくなり、慌てて道路の真ん中でしゃがんでいました。しかし、揺れが収まらず、雪が吹雪く中を大急ぎで走り家へ戻りました。

「危ないから外で待って」と、優太たちに言っていて一人で家の中に入りました。すると、何から何まで物が落ち、とても片づけられる状態ではありませんでした。二人で出かけていた両親に連絡だけでもとうとうと思いましたが、電話はつながらず身動きがとれませんでした。

その後、優太たちと高さ三、四メートルの高台へ上り避難しました。数分してから、敏雄の母親が迎えに来て、敏雄と拓斗は帰ってこきました。二人が帰ってから、

言いました。それを聞いた僕は言葉を失いました。

どんどん増していく水かさは僕たちの首まで到達し、小屋から屋根によじ登ろうとしました。最初に僕から上り始めましたが、濡れた服がとても重く、寒さで手にも力が入りませんでした。僕の体はぶら下がった状態になりました。そして、次の瞬間手が離れてしまいました。その時は(死んだ)と思いました。でも自分の生きたいという気持ちの方が津波の力に勝りました。腕が伸び、足が何とかつき、九死に一生を得ました。どんどん波が引いていきました。「助かった。何度も何度もその言葉が口からこぼれました。でも、油断できなかった。僕たちは少し高い山へ身を寄せ合いました。山の山から流された優太の名前を呼ぶと、「助けて」と叫ぶ声が聞こえました。「生きてた。そうつぶやいた僕は何か気持ちが悪くなりました。あの時「帰るな」と言わなかったらどうなっていたのかと思いました。

その山の陰になっていた一軒の無事だった家にひと晩いさせてもらうことにしました。津波から二時間くらいが経って、流された優太がそこへ来て合流することができました。夜もずっと津波が来るんじゃないかと警戒し、しきりに確認しました。夜中、外に出ると空一面に星が広がっていました。きれいな星というよりも、不気味な感じがしてとても怖かったです。その夜はとにかく大切な仲間たちが大丈夫であることをただひたす



この「意味」っていうことですね、運動会にちゃんと意味があるっていう。意味があるんなら、これ普段の勉強もそうですよね。この俺たちが学んでいることにはすごく意味があるって子どもたちが実感した時って、さっきの表情になるんじゃないですかね。この意味を見いださなければつかりに学校に来ると疲れるとか、家に帰ったら明日行くの嫌だなと思ったり、こういうふうになるんじゃないでしょうかね。ここで詳しくは書いてないんですが、やっぱりこの運動会は俺たちにとつて意味があるって見いだした。これ、三年生の女の子なんです、実は体育うんと苦手なんですけれども、でもやっぱりこうやってきちんと意味が見いだせる運動会というのは素晴らしいと思えました。

地域ってなんなんだろう、学校ってなんなんだろうって、すごく考えさせられました。結論から言うと、学びたい子どもがいて、共に学びたいっていう教師がいて、子どもの生活を支える地域ってものがあれば、学校は成り立つというのが結論です。

我々は鉛筆一本から全てなくしました。データも一切ありません。そういう中で学校を立ち上げたんですけれども、その時に思ったのはこのことです。黒板がなくても教科書がなくても鉛筆がなくても実践は成り立つというのが結論です。その時に、それを支える地域っていうものに教員がやっぱり関わらなきゃないと。地域が疲弊したり地域が大変だっていう時に教員が学校の中だけで頑張っていればいいというふうには私は思いません



でした。この地域をなんとか立て直す、あるいは地域の力になるような実践を我々が作っていくというふうな覚悟を決めないともう学校ってできないなと。我々、学校が見捨てられて「もう地域いいわ」となれば学校はなくなるだけです、そうじゃないと。やっぱりこの学校に子どもを通わせたいという思いを親たちに持ってもらって、あるいは地域の人たちに抱いて貰うために、今我々が学校で頑張らなきゃいけないことですね。そうすると学校はやっぱり地域づくりの中心になるんだということですね。それは痛切に

優太が「俺も自転車で帰るから」と言い出しました。僕は「ダメだ。帰ってる途中に何かあったらどうするんだ」と呼び止めました。

僕と優太は薄着だったので高台を下り、家からタオルを持ってきました。高台へ避難してくる人たちも多く、高台の下で何分か誘導をしてから優太にタオルを渡しに行きました。親切な男の人が「寒いから」と言つて高台に置いてあった車の中に入れてくれました。その時車の中に十分くらいいましたが、その時車の外に母の姿が見えませんでした。

僕のことを心配してくれた両親は出かけた先の石巻から野蒜まで戻ってきてくれたそうです。しかし、喜びもつかの間、海岸の方から少しずつ波が見えてきました。その時は（まさかこまでは来ないだろう）と思つていました。次の瞬間、目の前に波が押し寄せてきました。「えっ」とにかくあの時は頭が真っ白というより真っ暗になりました。「走れ！」僕たちは津波から逃げるように走り出しました。運良く小屋のようところがあり、

間一髪そこに逃げ込みました。だけど優太は波に流されてしまいました。僕たちの小屋のそばを、「助けて！、助け！……」と叫びながら流れていく人たちもたくさんいました。水かさが増していく小屋の中で僕は母に聞きました。「そう言えば、親父ってお母さんと出かけてたんだよね？」すると母は、「お父さんは康生が家の中にいるか確認しに家へ入ったの」と暗い声で

ら祈り続けました。

次の朝、僕たちは大人の人に、「近くに生きている人がいるから手伝つてくれ」と頼まれ、そこへ行きました。そこにあつたのは僕の父親の車でした。（もしかしたら）と僕は思いました。しかし、中には別な人が乗っていました。残念な気持ちになりましたが、とにかくその人たちが助けようと思いましたが、（父の物が人を救つたんだ）と前向きに考えるようにしました。その後、公民館に向かいました。炊き出しで出されていたおにぎり食べて元気が出ました。ここでは平山先生ら三人の先生方や前日に一緒にいた敏雄や拓斗、卒業式の謝恩会から戻ってきた和樹先輩といったたくさんの人たちに会いました。震災の夜を一緒に過ごした優太も家族と再会し嬉しそうでした。優太とはここで別れました。そうしているうちに父の実家の秋保からおじいさんとおばあさんが迎えに来てくれました。「父はもしかしてだめだったかもしれない」と話すと、おじいさんたちは悲しそうでした。

秋保に行く前に、僕たちは中下の定林寺に向かいました。（もしかしら父が避難しているかもしれない）そこには父はいませんでした。だけど学校に部活の練習で残っていたバスケット部をはじめ、二中の人と会うことができました。みんなに「またね」と声をかけ、秋保へ出発しました。こんな時だからこそ友達と一緒にいたかったです。

思いました。

## 高橋満さんの発言



今日はみやぎ教育文化研究センターとで昨年度行った学校のヒヤリングの中から特に小学校を取り上げその分析を通すことで「地域と学校」の関係についてのいくつかの論点が見えてくるのではないかとということでお話をしたいと思います。

学校と地域の関係というのはなかなか我々の目に見えないところがあるわけですが、今回の震災を通して改めて地域と学校との関係が現れざるを得ないような状況が作られたと思います。その契機というのはやはり学校と地域が、あるいは地域の住民の方々が協力しあわなければ生き残れない、あるいは地域も学校も残れないという状況が作られた。

まず1の部分。学校が住民を守る大きな力になったという要素です。これはある意味で当たり前のことでありますけれども、震災、津波の避難の過程の中で学校、あるいは学校の教師たちが住民を誘導し、そして津波に巻き込まれそうになっている住民の方がたを救うために懸命に動いた。その過程の中で命を亡くされた先生もたくさんおられました。

教師として、自分の学区の住民の方々を助けるという思いがあふれているのではないだろうか

思います。

それから2番目の要素です。これは被災の避難所になった学校が住民の方々の支援を受けるといふ要素です。これもある意味では当たり前と言えども、震災、津波の危機の時に学校は一方的に救助をするだけではなくて、住民の方々の力があって学校も避難をする事ができたし、あるいは地域の住民の方々の持つ力が避難所運営等の、あるいは学校の采配の中で大きな役割を果たしてきた、それに関わる部分です。

避難所の中で地域の方々が、看護師さんであるとか大工さんであるとかコックさんであるとか、地域だからこそということになりますけれども、地域に住んでいらつしやる様々な職業を持つ住民の方々がそれぞれ力を尽くして、避難所の運営、あるいは避難所での生活を支えてきた。地域はそういう意味では多様な人材の宝庫でありますし、それが被災の際に大きな力になっていたということです。

語りを見てみると、学校のつながりがあるというんですね。PTAであるとか、あるいは母校としての学校であるとか、そういう人と人とのつながり、あるいは学校とのつながりの中で住民の方々が学校に物資を次々に運んでくるということ

です。  
特に震災に関わって言いますと、地域と学校そして他の民間セクターとどういふふうな関係が結んでいくのかということも論点としては考えていく必要があるのではないかと。実際、この震災

の中で、学校を再開し、あるいはその学校の中の授業を行っていく上で、NGOであるとか、あるいはNPOの支援の役割というの大きなものがあつたのではないかとふうに思います。

地域との連携ということは確かに大切なんですけれども、ある意味では地域を越えたあるいは国を超えた、こういったNPOであるとかNGOとの散発的ではない共同ということになりますと、特に宮城県の学校の場合に初めての経験ではなかったかなというふうに思います。これからの地域の、あるいは学校の復興という、あるいはその力を考えていく時にも大切な要素の一つになるだろうと思います。

即興のガバナンスという3番の部分になります。いわば危機的な状況の中で行政が全く機能しない状況になってきた、つまり制度的なガバナンスと言いますか、統治をする仕組みが動かなくなってしまったという、そういう中で共同行為が必要とされる時に関係する人であるとか機関が自然に作り上げていく、意志決定であるとかルールの仕組みというふうなそういう意味です。しかもそれがそういった危機的な状況の中で必要不可欠だったし大きな役割も果たしてきたのではないだろうか。つまり先行きの見えない状況の中で学校の先生方も住民の方々も自分たちの進む道を決めなければならない。どこに学校を再建するのか、再開するののかということも教育委員会は全く指示ができないような状況になっていた。そういう中で即応性や柔軟性のある運営というものをどうしていくか。そこで作られるのが即興のコミュニケーション

ガバナンスという、地域の住民の方々と学校が共同してそれを協議し方向を考えていくということがこの震災の中で行われてきたんじゃないかと思えます。しかも大事なことはこういった関係が言ってみれば自然にと言いますか、即座に作られてくるという、そういう関係が地域と学校の間に作られた地域と学校と、それがなかなか難しい学校というのが今回の震災の中でも、あるいは宮城県の間でも画然と別れてきたのではないかなと思います。

もう一つは、このガバナンスの中で、こういう関係ができてその中で誰が主導権を握るといふリーダーシップを取るのかというと、この事例でいきますと、すべての学校が、校長先生がリーダーシップ、中心的な役割を期待されてそれを担っていくということになるわけです。

最後に、地域と学校との関係というのは被災前から学校の先生方は意識的に取り組まれたというふうに思いますけれども、被災後地域と学校の再生の中で、学校としてさまざまな行事を通して、地域とのつながりを維持、強めるという意識的な働きかけをしている。

特に津波で被害を受けたところはどこもそうだと思いますけれども、いろいろな場所に分散している、あるいは仮設住宅も散らばっていると、あるいはその居住自体がまだ自分自身の生活の展望が明確でない中で、学校行事を通してつながりを作っていくということを、様々な運営も工夫しながら取り組んでいること。地域の一体感や参加のきつかけを作る中で、いわばコミュニティの力を



強めていくという介入の方法になるわけですけれども。そういう住民たちの心をつなぎ、あるいは参加を作りながら地域の復興に働きかけていく、これも際だった特徴です。それだけではなくて様々な、言ってみれば保護者あるいは子どもたちや住民たちへの働きかけの中で、震災後、学校先生方は地域との関係を作り続けてきているというふうに言えるかと思えます。

最後に、地域と学校との関係を巡って二点だけ指摘しておきたいと思えます。

一つは、教育委員会を含めてやはり行政の限界、これは阪神・淡路の大震災のときにもよく言われましたけれども、改めてまさにそうなんだなと。先生方にも文書では伝わらなくて、校長先生方の、いわゆる口伝えと言うんですかね、唯一少ない指示の一つで、学校運営を校長同士で話し合いながらやってくださいと。結局、校長先生方の裁量に任せますという、これは行政の空白の中で即興のガバナンスが立ち現れざるを得ないということにもなるわけですけれども。政治的なガバナンスと違ってこのガバナンスの大事なところは、校長先生もなかなか辛かったと思うんですけれども、つまり明確な答えがない、で、不透明で先が見えない、そういう中で、これは職員の方もそうですけれども、責任を引き受ける覚悟がなければ引き受けられない、そういう状況に置かれたということが一つですね。校長先生には適切なリーダーシップが期待されるわけです。総じて適切にその責任を果たしておられたんじゃないかなあというふうに思います。

この即興の対応が可能になったのは、普段から地域住民と学校との交流があつて、顔の見える関係が作られている。被害を受けた学校では、震災前からももちろんそうですけれども、今、国の政策としても、地域の歴史とか文化を学校教育の中に生かしていくこと、あるいはその際に住民の参加、学校と地域との連携ということが強調されるずっと以前からこういった教育活動を大切にしてきた、そのことがこの危機の時に生きてきたということです。



教育のコミュニティであるとか、私たちの領域でいうと実践コミュニティへの参加の中で教師と住民の方々が共通の理解であるとか、信頼関係を育んできたとか、その結果が即興のコミュニティを作る力になったのではないかと思います。

今後の研究すべき課題は二つで、一つは広域合併が行われたので広域行政の中で教育委員会、教育のガバナンスをどう構成していくのかということ、石巻の例から考えても検討すべき課題なのかなあとこのように思います。もう一つは学校統廃合の動きがすでにかなり固まって出てきている中で、それは教育行政として進めているわけですが、それでも、そういう視点は大事なただけれども、地域の復興の中で学校と地域は別々に議論と連動していかないと、学校と地域は別々に成り立たないというのが今回の教訓なのではないかなというふうに思います。

### 田中孝彦さんの発言



このセンターの名前で出た「南三陸戸倉小学校 3・11決死の避難から善王寺（登米市）までの道を語る」という本を読ませてもらって大変な事実が書かれていると思います。それでその感想をこのシンポジウムそのもののテーマでお話をさせてもらいたいと思います。

この中で語られている事実は、地震・津波が起

こる前から実際3・11がどうだったかについていうことと、そこから登米市へ避難していき、避難所での暮らしがどうで、ワールドビジョンの支援がどうだったかということ、そして登米市の善王寺での学校再開に向けてどういうことが行われたか。学校再開と教育の課題が何か、その中で地域と結びついたカリキュラムの重要性、そして地域と学校との結びつきを改めて考える、そういうようなことが語り合われています。

この座談会は2012年の2月5日、今年になってから。当日はどうかであり、避難がどうかであり、その間の瞬時の判断とか、量的にはそういうところが多いわけですが、全部読んでみると、その直後の時点での判断だけではない、感じ考えられたことが随所に出てきていて、この2月までかかって考えられていたことがこの座談会に染み透っている、そういう印象を持ちました。ですから、丁寧に読んでいくと、その後行われたことや感じられたことや考えられたことがかなりよく見えてくるという、そういう意味で非常に面白い大事な資料になるというふうに僕は思ってたわけです。

一つはですね、やはりこの非常に厳しい状況の中で、子どもの状態をどう見るかとか、子ども理解をどう深め合うかという共同の議論がずうっと行われてきた、そしてこの座談会自体がそういう議論の場の一つでもあったというふうに感じさせられる部分が随所にあります。麻生川さんの発言の中に、「今年一年の課題は心の中にある傷というのがやっぱり気を付けなきゃいけないという部分です」「子どもたちはみんな時間が経つに

つれて元気になっていいると思っただけだけど、そう単純ではなかったというか、子どもたちからとったアンケートはびつくりするくらい、自分たち自分の問題に答えている子が多かった、自分たちちよつとつらい部分があるっていうか、そういうことを語っているものが多かった」とあります。僕の言葉で整理させてもらおうと、子どもの中にある元気さと心配、きつさの同居っていうか、そういうことが見られたっていうことです。それから、親としての心配という所で佐藤さんが「確かに言葉使用とかイライラ感は前より増しているんです。それを頭ごなしにも怒れないんだ。それを野放しにもできないけれども、その辺、ものすごく難しいな」、後藤さんが「最初のうちは、ここでご飯食べないと、いつまた何があるか分かんないからって、ものすごく食べていた時もあった。」「寝る直前まで食べていましたね。冬になりかけのくらいからですかね、やつと食べなくなつたのは」っていうのが出てきて、佐藤さんが「同じですね」っていうふうに言われている。「また何があるか分からないから、食べられるときにいっぱい食べてしまう」というようなことがほんとに起こって



いたということを、僕、改めて知らされた思いがしました。

それからワールドジャパンの高田さんが、「本当に最初、5月の中旬から入った頃は子どもたちの様子としてこちらから話をするのに対して何か言うとして津波の話にいく」と。麻生川先生の方にケース会議で「こういうことがあって」と話をする。「学校ではそんな姿見たことがないです」という話を受け「そうなんですか。うちでは結構そういうのが続いているんですけど」という話で、「そこで話を摺り合わせてということとは結構続けてはいたんです。本当にその繰り返しで今まで来ているって感じですよ」というような部分があります。この厳しい状況の中で、先ほど紹介したような地域を構成する多様な人々が子どもたちの姿、それも元氣に見えて極めて緊張や不安を溜めている、そういう姿の視方を少しずつ少しずつ深め合ってきておられたことが、非常に大きい感想の一つでした。そして、この座談会自体がそういう場所でもあったというか、そういうことを思ったわけです。

それからもう一つの大きな感想は、ここに出られた当事者の方々に「地域と学校」の結びつきの重要性の再認識というものが表現されているということを思いました。それは、村岡さんが、「自分たちのためもあるんですけども、やはり子どもたちを育てるといふ観点を持たないと地域の発展っていうのはあり得ない」「地方つつうのはやっぱり昔から人を育てて都会さ排出してきた場所なので、歴史は繰り返して、またそういう中から人

を作つて都会さ出してやる時代がまた来ないとも限らないので、いい理論を持って行政とか国の方に働きかけて、ここに先生方もおられるので、やっぱり物語を書いてもらって（いい表現だと思うんですが）一日も早く学校でも何でもできるような」「やっぱり東北人は無口でもこの機会に声を出してこの機会に作つてけるつうことをはっきりと申し上げて、みんなで力を合わせるようなのが一番いいと私は思いますけどもね」と発言されていて、僕は、それを、地域の再建にとつて、子どものことを考えることと学校の再建を考えることの重要性、それから日本社会全体の再建にとつての地域社会の再建の意味、そういうものを語られた言葉だと読みました。

それから麻生川さんが、「やっぱりそういう地域の学校の再建を考えると、この頃ずつと思つているのは、学校のすごく専門化してしまう部分が強くて、特に学力を向上させなくちゃいけないとか、教員は授業の力を上げなくちゃいけないということがすごく声高に言われるんですけど、学校つてのが果たしてきた役割というのはこの地域ではそれだけじゃない」「地域と学校という、学校が果たすべき役割つていうのがあんまり専門化してしまうと何か間違つてしまうのかな。人間を育てるといふことはやっぱり総合的にいろんなことがそこに関わつて来る訳なのでそれを切り落としてしまつて何か間違つた方向に行つちゃうんじゃないかなと発言されています。これを、僕は、地域の生活圏の有機的な一部としての学校人間の暮らしと子どもの育ちを支える学校の総合

的な役割の再認識ということが、この過酷な事態に直面しながら、直面した当事者の人たちの間で起こつたことではないかというふうに思いました。ただ、同時に、人々と子どもたちの間に新たに生じている不安と意見の対立もあると、時間が経つにつれてこの学校がどうなつてしまうのか、なくなつてしまふのじゃないのかとか、自分の地域はどうなるのかということでの子どもたちの震災直後とはまた違う不安が出てきているということ、高田さんやなんかも言われていました。それから住民の間にも、もとあつた地域を再建するのか、高台に再建するのかというような違いも出てきていて、新しい不安と意見の対立が出てきていて、それは見過ごせないというか、ただ地域地域つて言つただけでは済まないという発言のあつたことは重要なことだと思つて聞きました。

最後に僕がこの座談会記録をどう読ませてもらつたかということですが、簡単に言います



と、当事者による復興の哲学の、当事者による表現だ。そしてそれは、学問のあり方というか、質を問うている資料だというふうに感じました。

この資料はですね、地震津波の大打撃の中で行われた地域住民、学校教師、行政担当者、それから援助職、と、子どもたち一人ひとりの瞬時の判断と、自発的な共同の行動、判断、思索についての、当事者による想起と、語り合いの記録と言うことができると思います。

カナダのナオミ・クラインの「ショックドクトリン」が去年の秋、日本で訳された。世界に広がってきたいわゆる新自由主義のグローバリゼーションが何をやってきたかということで、社会的、自然的災害が起こって、人々が生きるために精一杯になって混乱しているときに、その混乱に一気に乗じて、多国籍企業の利潤などを追求する経済政策と、それを担保する政治をやってしまったうっていうことを繰り返してきた三十何年だったというのを克明に書いています。そして、この筆者は、震災後の日本もそういう動きと無縁でないのじゃないかと、市民のそういう動きに対する警戒の目が必要ではないかと後書きに書いています。

僕も、自分は一人の教育学者ですから、現地に çıkけて当事者の生活と声を丁寧に聞いて、それをいろんな領域の人が考えられるような言葉にしていく、時間をかけてしていく、それしかないと思っけていますが、そういう動きをゆっくり時間をかけてやってるだけで済むかという危機感みたいなものが、正直に言っけて、今、あります。それは、

こういうふうな国際的な災害便乗型資本主義とも言うべきものの動きが、日本でもやっぱ顕著になってきている、そういうふうな思わざるを得ないからです。ただですね、クラインは、この最後のところで、大きな災害でダメージを受けた人が、自力で家を建て直したり地域を回復したりしているのは、実は家や地域を回復すると同時に自分で自分たちを癒しているんだというふうに書いてありました。そして、この多国籍企業主導型のグローバリゼーションのこういう災害便乗型資本主義の動きに対抗する基本的な原理は、そういう自分たちで自分たちの地域を立て直しながら、自分たちで自分たちを癒していく自力更生だっけていうふうに言っけているわけです。僕はこのカナダの女性の書いた本の言っけていることと、このパンフレットの言っけていることは通じているものがあるような気がします。復興の質を問う哲学の当事者たちによる表現、発信の試みとして読まれてよいのではないかとこのように思いました。

### 本田伊克さんの発言



3月11日の大震災によって学校の二つの側面とこの学校が行っけても同じ条件のもとに同じ内容を学ぶことができるというように構成され、教師もまたこのシステムの担い手として

しての役割を担っけています。

そういう学校がどういう機能を果たしてきたかというところ、一つは、国家によって価値ある行動規範の標準化を通じて国民統合を担う、これが一つです。それから知識の面でいうと「互換性的普遍性」、要するにどこに行っけても通じるような知識、それを伝達するということなんです。したがって、近代学校というのは、そこで伝達獲得される知識が子どもたちの日常生活で培われる意識とか経験に対して普遍的、抽象的なために、一体何のため、誰のため、なぜかということのスルーしてきたんじゃないか。そういうこともあると思っけています。ですから近代学校は、普遍的抽象的な意味を指向するということ意味でも、また、標準化された学力にもとづく選別を通じてより学力・学歴序列の高い学校や地域に移動を促す意味でも、地域と子どもの日常に根ざした「いまーここ」を超えていく意識を生み出してきたし、今も生み出している。そういう側面があるかと思っけています。

もう一方で、学校は、地域と不離一体に形成されてきた側面があります。学校が地域共同体の原理を取り入れ、学校コミュニティそのものをつくっけていきながら、文字通り学校自体が地域づくりの拠点となっけていく。そういうふうにして学校が地域に浸透していった。その中で、父母地域住民のネットワークを学校自体が形成して、それぞれの地域に独自の生活条件とか課題とか、商業、文化こういうものを継承発展する拠点として位置づきながら「いまーここ」に根ざす人々のつながりを育む。こういうところがあると思っけています。そう



いう中では、機能システムとしての学校にみたような学力の標準化とか、行動の標準化・規格化に對して、ある意味では抗う動きがあったと思いません。このような二つの側面が、今回の大震災でいかに問われたか、問われているかを、次にお話します。

もともと学校というのは、この二つの側面を持ち、その間に緊張を孕みながら今日に至っていると思いますが、大震災直後は、いわゆる日常「モード」から学校は解除された。そして時間が経つにつれ、ある意味では学校的な日常への再帰の動きが起こってくるということだと思います。

「日常」モードから解除された学校には、文字通り学校が避難所になる中で、子ども、教職員、父母、地域住民、避難者、支援者の間に日常的に営まれている機能分化し、制度化された人間関係や、標準化、規範化された知識・行動様式というのが緊急的に解除されて、懸命に支え合い励まし合うつながりが形成されました。その状況において、避難所運営を主体的献身的に担う子どもたち姿とか、厳しい状況をたくましく生きて困難な人々に手をさしのべる子どもの力強さとか、優しさというのが見直された。何よりもうれしかったのは、学校に来て友だちに会えたこと、という多くの子どもたちの思いには、「いまここに」に根ざす学校の原点を見る気もします。

一方、もともと被害を免れていた地域であるとか、被害が軽微であって回復の早かった地域とかでは、学校的な日常への再帰の動きが起こってきます。これは機能システムとしての学校の日常

を取り戻そうということが進んでいきます。では、社会の再生に向けた大きな意味での政治的課題と展望、その中で学校の役割というものを、次に考えてみたいと思います。

今回の震災で明らかになったことの一つは、中央政府が専門的見地からすべてのケースに通用する判断や行動の基準を示すという図式への信頼が大きく崩れたということです。例えば、福島避難区域を巡る問題とか、文科省が出す積算放射線基準のブレと再設定とかを見てもわかると思います。もう一つは、投票行動によって、みんなを決めたことはみんなが守るべきだという「集合的な拘束力がある決定」の正当性が揺らいでいる。つまり、みんなが決めたことだからみんなで守ろうということ自体が、なかなか難しくなってきていると思います。例えば、津波被害を受けた地域から移るか残るか、移転先を誰がどこに確保するか、そういう問題がなかなか折り合わない。デュピュイという人は、未来の破局が予測されるとき、それが現実になる前に行動しなければならぬと言っています。未来の破局をもたらすものは一体何なのかとか、それからどういう対処をすべきなのかとか、そういうことを巡る人々の社会像や価値観も折り合わない。大局的に今とこれからの社会と人間にとって本当に大事なものを共同で想像していく、その道徳的想像力がバラバラになって折り合わない。こういう困難を乗り越えて、新しい政治的な意志決定の形、新たな社会・地域づくりのプロセスを生み出していくことが求められています。

それでは、政治システムと教育システムが果たすべき役割は何か。まず行政に求められるのは、現時点で知り得た情報は何か、それから判断や根拠が割れる場合は、それも含めて情報を示す。人々が意志決定・選択するオプションを示すことが求められていると思います。また学校に関して言えば、校舎が壊され、子どもが流出して分断し、学校ごとに様々に異なる運営上の困難があるなかで、自らも必死で生き、何とか子どもたちに少しでもいい条件で学ばせたいと思っている教師や、絶望と疲労を抱えながらも、一方だけなげに、あきらめたくましく、また不安の中で新たな一歩を踏み出そうとしている子どもたち、その状況への配慮と、ケースバイケースによる柔軟な対応が求められると思います。

最後に何と言っても、子どもの権利を軸に考えなければいけない。一つは、自己成長の権利ということを保障していかなければいけないと思っています。これは、過去と未来の接点に生きる自身を見出して、物語を紡いでいくということです。もう一つは、包み込まれる権利ということ。これは、社会にも、それから大人にも、仲間にも、違いを認め合いながら暖かく包まれる権利です。それから参加する権利です。これは、学校・社会の意志決定に、十全な権利を行使できるようにするまでの発達を保障されながら参加する。こういうことが3・11前の学校でももちろん問われてきたわけですけど、3・11後にこれをどういうふうにしていくかということも考えていきたいと思っています。

## パネリストの提起を受けての発言から

秋永 「今、ここにしかない」という形で本田先生が表現された学校の役



割は、特に緊急時の時に非常に重要になる。ただし、時間が経つに従って、その被災地の所ではそう

いう状況にあるんだけど、被災地でない所は、淡々と平常の、今、「どこでもいつでも同じ」学校の状態が続いて行く。非常にその間に落差についていか、差が見られてくる。その時に、こういう場に、その被災したところでも周りでいつものように動いている学校を見て、どういふふうにしたらいいのか、いろんなことで問題を感じてくると思う。やっぱり時間が経つに従って、特に被災した所では、どういう形で学校と地域との関係を考えて行ったらいいのか。緊急時の時は、地域の中心として、非常に大きな役割を果たすけど、それがどういう形で持続させることができるのかそういう問題があるんですね。少し分かりにくい言葉になりましたけど、その辺の所を切り口にして、後半議論を始めていきたいと思えます。

● 私も被災者の一人。被災した教員がこの会場にあまりいない。被災した教員、なかなか語れないっていうのがあるんですね。語る気持ちに今の段階でもまだなれないですね。と同時に、学校では、子どもの語りを聞く立場でもありま

すね。そして自宅は再建しないといけない、家族の供養もしないといけない。そして地域も復興しないといけない。被災した後の学校はどうなっているか。石巻の教育委員会の今年の方針には、石巻子どもの未来づくり事業の一つは「学力向上」、二つめが志を持って生きるための「志教育」。「心のケア」という言葉はまったく別の項目に入っている。学力形成とケアの問題を全然結び付けていない。「地域復興」という言葉は一字も入っていない。地域を復興する子どもを育てなくて、何の、誰のための学力を育てるのかという疑問だ。

● 「地域と教育」ということで言えば、私の家の隣は南向台3号公園と言い、福島市の公園除染の第一号。福島市では、昨年は基本的に運動場を使わない。制限的に体育の時間に少し使う。去年は福島市はプールは使わない。除染が終わったので今年からプールを使うと行政が決めている。

子どもたちは昨年一年ほとんど運動を学校でできなかったため非常に体力が下がった。子ども同士が群れたり出会ったりする時間もとれないのに、公園も全部親が使っちゃいけないと言っから、除染しても誰も使わない。公園で子どもを見るのが無くなった。家族も分断しているし、地域も分断しているし、その中で子どもたちがどれほど辛い思いで生きてきているか。体力も失いながら。それが福島の子どもたちだっということをは是非忘れないでいただきたい。

たい。私も、宮城県のこと、岩手県のこと絶対忘れないし、日本の災害なんだという視点でこれから一緒に歩ませていただきたいと思う。

● 子どもたちは真剣に地域というものを考え受け止めようとしている。制野さんのお話からも、また、センターの高校生座談会の内容からも読み取れる。でも、過日、仙台の統廃合問題に関わったときに感じたのだが、働く世代というかその子どもたちの親の世代にとっては地域というのは必ずしもそのような存在ではなかった。これから「地域と学校」を考えて行くときに、競争の原理とか自由主義的な考えに取り込まれている世代の人たちとどう対話していくかが課題だ。

● ごく少数の意見でものごとが進められている。しかし、今の状況の中で地域の人たちが考えてきていることは、今日ずっと話されてきていることだけれど、学校があつて初めて地域が発展していくと。そして、地域のなかに学校病院を必ずつくらなくてはダメだと。今現在、自分のいる地区では住宅の建設がものすごい勢いですすんできている。当然、そこに学校をつくればさらに発展する芽があるだろうけれども、そういう町作りの視点と学校再開の関係が切り離されたところで議論され、今にいたっている問題がある。

ブックレットを読んで

# 戸倉に 行かなければ!

山本明德

震災から1年が過ぎようとしていた3月初め、教育文化センターから小冊子「南三陸・戸倉小学校3・11決死の避難から善王寺(登米市)までの道を語る」が届いた。

2年前に赴任した校長先生や当時のPTA会長さん、区長さん、南三陸町の職員の皆さんなど8名による座談会の内容であった。

戸倉というと、震災で犠牲になった猪又先生の勤めていたのが戸倉中学校で、いつかその地を訪れて冥福を祈りたいと思っていた。

昨年のこの時期を思い起こすと、私の住んでいる丸森町ではようやく電気が復旧し被害の全体像が見えてきた時期でもあった。そして、本吉の小泉中学校に養護教諭として勤務していた二女とやと連絡が取れ、家族全員が一安心し、さらに、その一週間後には異動による二女の引越しを手伝うために気仙沼の地を訪れ、その惨状に目を覆ったのだった。

年度末を控えた今年の3月17日(土)、18日(日)の2日間、三女と妻の3人で被災地を訪ねる小旅行を計画、名取・仙台荒浜・石巻・女川・雄勝・南三陸・気仙沼・陸前高田をめぐるというルートをとった。この被災地訪問は、震災から1年後の現状を写真や画像を通してではなく自分の目で見たかったこと、大学に進学

する三女にも自分の目で見させておくことが大きな目的であった。

## ブックレットを読む

座談会の中では、戸倉小学校の麻生川校長先生が赴任して以降の学校の避難マニュアルをめぐるご自分の考えや職員との係わりについて率直に述べられていた。校長として赴任した最初から避難マニュアルに違和感を抱いたこと。近くの高台にある避難場所では時間がかかってしまい間に合わないのではないか、隣の保育所のマニュアルには小学校の屋上が避難場所になっていて、訓練時には保育所の避難のために屋上への非常階段を解錠後に高台へ向かうことへの不自然さ、小学校も屋上への避難が確実な方法ではないかと思ひ先生方に提案した。しかし、その提案は先生方から「絶対だめです。とにかく高台なんです。」と受け入れてもらえず、一旦はひっこめたものの、2年目はより自分の意見の正しさを裏付けようと消防署へ確認し、再度職員へ提案したところやっぱり反対が強くて決められずにいたこと。そして、東北大学の今村文彦先生に『屋上でも大丈夫』というお墨付きをもらって最終決定をしようとして「電話をして確認します」というところまで話を進めていた。そうやっているところで3・11を迎えたことが話されていた。もし、マニュアルを変えて屋上に避難していたら全滅だったとも話され、小学校では保育所のために階段を解錠して高台へ避難したそうですが、保育所の所長さんが地元の方で、小学校ではだめという判断でやはり高台への避難だった





ようだ。

地域の方は、海側の住民が高台へ避難し助かったのに対して、亡くなった方の多くが海の見えない所にいた住民の方々だったというのも津波に対する避難の教訓としなければならぬと語っていたこと。高台といってもあと数メートル高い波が来たらと死を覚悟したこと、保育所や小学校の子どもたちはみんなやられてしまったと思つたこと、避難後、何としても子どもたちを寒さから守るために倒壊の危険があるにもかかわらず五十鈴神社の中へ入られて夜を明かしたこと。ある時は行政の壁を乗り越えながら多くの住民の協力を得て登米市へ避難し、旧善王寺小学校で学校を再開にこぎつけるまでのリアルな体験と想いがのべられていた。また、再開後の学校教育活動では地域の方と作り上げてきた蚕の飼育、鮭のふ化放流、鹿子踊りで子どもたちと係わってきてくれた地域の方々を思いを述べられていた。

私は、読み進めていくうちに、何か今の学校がなくしかけているものがあり、この震災を経て学校が大切になければならないことがなんとなく見えてきたように思つた。そして、それを確信するために、戸倉を含めて改めて被災地の学校を訪ねなければという想いがどんどんどんどん強くなってきた。

### 戸倉を歩く

戸倉の地に向かったのは2日目であった。涌谷の笹岳に前日の宿をとり朝8時に出発し、柳津から東浜街道を東に進み横山を経て戸倉に入る約30分の道のりであった。私たちにとっては初めて通る道であり、道路の右側を流れる川が見え始めると、改築している家がありここまで津波が遡ってきたと分かった。小山の陰になつて海が見えない西土地区では海が見えないために多くの犠牲者が出たことが頷けた。道路沿いには全く家がなくすぐ左側には気仙沼線の戸倉駅跡だと思われる残骸が見えてきた。道の右側に

仮設のコンビニが営業しており、車が3台ほど止まっていた。東を見ると当然のことだが遮蔽物が全く無く、海が間近に見えた。コンビニを右折すると南東のほうに見える3階建ての建物が戸倉小学校であること、また、その奥のやや高くなっている所に見える建物が中学校であることがすぐに分かった。右側を見ると多くの住民と小学生や保育所の子どもたちが避難した高台とその奥に在るであろう五十鈴神社の上り口であることを示す赤い門が見えた。道沿いの学校の入り口があったであろうと思われるスペースに車を止めた。校庭にはがれきの山ができており、鉄骨がむき出しになつて形をとどめぬ体育館であったと思われる建物、窓ガラスがやぶれたり、コンクリートが割れている校舎の痛々しい姿があった。

五十鈴神社のある高台の森は、上のほうだけスギ林が残つていて、その下は倒木が見え津波がそこまで来たと一目でわかる状態であった。神社の西側はやはり小さな谷になつていて、「周りが全て津波で神社のある杉林だけがぼっかり海の中に浮いた状態だった」という言葉が実感を伴って迫ってきた。

丁度そんな時、見たことのある車がやってきた。なんと仙南支部で一緒に活動している書記長の鈴木さんと副支部長の渡邊さんだった。聞けば、中学校で亡くなられた猪又先生の一周忌の法要の日であり、お寺に行く前に南三陸町防災庁舎や公立津川病院を見てきたとのこと。互いに当日の行動については知らないし、しかも、僅か15分ほどの時間帯の偶然の出会いだった。猪又先生が演出してくれたのかもしれない。大きな揺れの後で、津波の恐怖と闘いながら避難した子どもたち、児童生徒の安全を守るために自身の恐怖と闘いながら行動した先生方の姿は想像に難くない。

その後、戸倉中学校に車を進め、中学校の校庭は仮設住宅が建つており、僅かなスペースで、お



父さんと子どもがプラスチックバットとボールで遊んでいた。中学校の1階の窓はベニヤ板が貼られていたが、体育館と校舎をつなぐ通路や自転車置き場の鉄骨は曲がり、体育館の2階部分の一部は破れたままで、そこまで津波が押し寄せたことが想像できた。中学校から眺める戸倉湾は波も穏やかで水が澄み遠くまで見渡せ、牙をむき黒々とした壁となつて押し寄せた海となつたことは夢であつたのではないかと思わずにはいられなかった。しかし、崩壊した防潮堤や更地となつた戸倉の地は、まぎれもなくそれが現実だつたことを物語っていた。

### 歩きながら考える

埼玉生まれの麻生川校長先生が、もし自分の考えを職員会議の中で「とにかく私の責任で避難場所を屋上に戻します。責任は私がとりますから従ってください。」と言っていたらどうなっていたのか。教職員が校長の一度ならず二度目の提案説得に声を上げなかつたら……。今村先生のお墨付きをもらった後の会議だつたら……。

今、学校管理規則の変更や教職員人事考課制度の導入によって校長の権限が強化され、パワハラが増加や、あたかも校長の意向に沿った行動をするのが教職員の使命だというような管理主義的な学校経営が増えてきている。実際に、震災後避難所となつた学校で、自らの家や家族が被災したにもかかわらず子どもたちや地域住民のために懸命に働く教職員に対して「休憩時間はありません」「先生方の勤務はボランティアです」と言つた管理職もいたようだ。

また、地域をよく知り地域に基盤のある教職員がいなかつたらどうだつたのか。教職員の広域人事やブロック制などの方針で、車で4、50分かけての通勤をしている教職員も多い現在である。さらに、学校が学力テストで点数を上げるための『学力向上策』

に重点をおいて、時数確保のために地域と共に作り上げてきた教育や活動をどんどん減らして地域から離れていつていたらどうだつたのだろう。ふるさと学習を通して子どもが地域を見つめ、地域が子どもを見守ってきたからこそ、子どもたちのために真っ先に炊き出しのおにぎりを持つてきてくれたし、子どもたちも避難所で住民のために働く姿が見られたのだろうと思う。ハード面の復興はいくら進めても、本当の意味での心の復興が果たせるのは、地域と学校が一体となつて進められる過程にあるものだと思う。

### 「復興」の響きとは遠い現実

養殖いかだの浮かぶ波静かな戸倉湾を眺めながら東浜街道を北上し、私たちは1年前まで二女が暮らしていた気仙沼に向かった。主要市街地はがれきの撤去が進み、うず高く積まれたがれきの丘が所々にできてはいるものの、あまり人の入らない所にはまだ小型漁船がそのままだったり、地域によってかなりの違いが見られ、『復興』という言葉の持つ響きからは程遠い現実が広がっていた。また、数隻の漁船が係留する港、養殖いかだの浮かぶ女川湾や雄勝湾、仮設住宅のコンビニで買い物をする人々、仮設の食堂で蕎麦屋を営む人など地域に生きる人々の生活の一端も目にしてきた。

(伊具・金山小学校)



# 元気な五年生との

## 二か月

千葉 政典

最近、ずっと高学年を担当することが続いている。今年も元気な5年生38名と4月のスタートを切った。まだ2か月しか経っていないのだが、教室の様子を書いてみたい。

### 1. 学級作りのこと

台原小学校は数年前から毎年クラス替えを行っているため、持ち上がりクラスを担任することはなくなつた。だから、担任は4・5月に学級の集団作りをする必要が出てきた。

#### ①学級開き

まずは、学級開き。担任発表されてから、「今年はどうな出会いをしようか」と考えるが、その時々で自分はまだまっていることをして見せたりする

ことが多かった。ちょっと前にはマジックにはまっていたので、インパクトのあるネタを2、3披露していた。10円玉を消したり、ハンカチを消したり……。ヨーヨーの技を見せたこともあった。まさに芸は身をたすく。何か得意技を持つことが大事だと思ふ瞬間である。今年も、学年開きだったので自己紹介と趣味の紹介で終わってしまったが……。

#### ②係活動

次に力を入れるのは、学級の係活動。低学年であったような先生のお手伝いの活動(いわゆる当番)ではなく、学級が楽しく生活できる場となるように自分たちで創意工夫してできる活動が係活動だと子どもたちと定義

して、自分がどんな係を立ち上げたいかを考え、仲間を集めて、実際の活動を計画させる。

今年も掲示係、集会係といった定番の係の他にどつき係が誕生した。何のことはない、友達を驚かせて楽しささせるという係なのだが、4月に何人かを偽ラブレターで驚かせたくらいで活動が停まってしまった。テレビ番組を作成して放送する係や、友達の誕生日などの祝ってあげる係もあったが、何せ子どもたちは一斉下校するので放課後の時間がなく忙しいので、活動の時間を確保するのが難しいようである。それは教員の世界と同じかもしれない。頑張っているのは新聞係で毎週B4版の学級新聞を発行している。

#### ③集団遊び

4月には、班対抗のゲームを毎日のように行った。班のメンバー同士で話し合ったり、一緒に作業したりといった活動を取り入れ、遊びの中に子どもたちがお互いを認め合う場を作った。子どもたちが気に入っているのめだ。子どもたちが気に入っているのは、昔、あるテレビ番組でやっていた「竹の子ニヨッキ」というゲームである。単純なゲームだが異様に盛り上がる。(手の平を胸の前に「合わせて」「竹

の子、竹の子ニヨッキ」のかけ声の後で「1ニヨッキ」「2ニヨッキ」……と叫びながら手を上に上げていく。この動作が竹の子が生える動作に似ているのでこんなゲーム名がついたのだろう。その時に同時に動いてしまった人が負けとなる。(写真①)これはお勤め。隣のクラスに多少迷惑がかかるが。

また、5年生のフロアーにはカーペットが敷いてある何も置かれていな



写真①「竹の子ニヨッキ」ゲーム





写真②「百人一首」

い教室がある。これを活用しない手はないと、5年生を担任したら、ここで百人一首を行う。3年前に5年生を担任した時に、教室では何も話さない場面緘黙の子がいたが、百人一首を始めたら、家で家族を相手に猛練習し、常に優勝してみんなから一目置かれたということもあったので、何がきっかけで子どもが自信を持つか分からないという考えのもと、百人一首をやっている。もう10時間(回)は行っている。

るが、入れ替えありのランク戦なので実力が伯仲していて面白い。(写真②)

## 2. 運動会のこと

5月に運動会が行われた。種目の中に学級対抗リレーがあり、クラスから選抜された男女各6名がチームを作って戦った。私のクラスにはとても勝負にこだわるK君がいる。彼は学年で一番足が速いのだが、性格もはつきりしていて自分でも何もかも決めてしまっている。練習時間から内容まで決めて、それをみんなに強制し、それをしない子には「リレー選手にはいらない。」と言い放つてしまう。私も朝8時前から一緒に校庭でバトンパスの仕方を熱血指導し、練習メニューも提案したが、K君はそれでは他のクラスに負けてしまうと、バトンパスの時間をストップウォッチで一人一人計って表に書き込ませたり、何度も走る順番を変えたりする。そのたび、他の子たちは私に助けを求めてきた。K君の意欲を評価しつつも、穏やかに「みんなが納得するように進められなければ駄目だ。みんなできちんと話し合って決めていかない」と諭す。

運動会前日、彼は今までアンカーだった自分をスタートにしたいと言いつつ

出した。リレーは最初で先頭にたつた方が有利だと話していたからだ、それまでの学年の練習で1位にはなれずにいたのに、何のはずみかその順番で1位になってしまった。これには学級全員で喜んで、明日の本番でも頑張ろうという雰囲気になりあふれたのである。しかし、当日の朝、K君は自分アンカーをしたいと言いつつ、スタートはA君かY君にしたいと言いつつ、これにはみんな反発したが、誰も強く反対と言えない。開会式が始まるので、そのことは保留にしていたが、競技が始まる直前、入場門に整列してもまた解決してないので、「K、お前が決めたオーダーに責任を持って。」と話し、送り出した。スタートは作戦通りトップ。途中抜かれるも、またトップを奪い返すデットヒート……。結果は僅差の2位。K君は「R君のバトンパスが悪い」とかぶつぶつ言っていたが、とりあえず選手も応援の子たちも満足の結果だった。たかが学級対抗リレーなのだが、ドラマがあるものだなあ。

## 3. 学習のこと

「先生の授業 早く終わる」とは、授業後に何人かの子どもから出てきた

言葉である。楽しくて夢中になつていくからあつという間に時間が来るという意味であるらしい。まあ確かに職員室を出るのが遅くて、開始が他の先生より遅いから、早く感じるのは当たり前なのだが……。それから「他の先生と授業が違って楽しいし、わかりやすい」とも言われた。すぐに話が脱線してしまうし、指名の仕方や発表のさせ方、グループでの話し合い活動などそれなりに工夫しているので、そう言われるのだろう。子どもからそんな言葉を聞くと悪い気はしない。というか「よし、やった」と心の中でガッツポーズを作ってしまう。私は、一方的に話す授業は好きではない。授業は「子どもたちが考えを持って参加して、楽しく分かる」ものでないといけないと思っている。このような言葉ができるということは、「ここまではいいのだ。」(「桃花片」の場の心境で……)ここから、一年間授業の質を上げて、子どもたちから、「先生の授業はふざけている」とか「遊んでばかりいる」と言われないようにしなければ。

そんなことを考えながら、また明日の授業を頭の中でイメージするのである。

# 子どもの心に寄り添う教師の姿に学ぶ

佐々原 和子

また教育文化研究センターがなかったころ、宮城の教育実践を検証して保管、普及するセンターが必要だ……と組合や他の会合で話があるたびに、子どもと教師がいつも笑顔でいられるように、教育センター作りの運動をできるだけ応援しようと思ったものです。

その後センターは設立されましたが、教育状況の変化や学校現場の多忙化なども加速して、私たちの実践にかかわる雑誌「教育文化」や「カマラード」は、惜しまれながら廃刊となってしまうました。センター通信66号が届く前からうわさされていた別冊は、「教育文化」や「カマラード」に続く宮城の教育実践集となるのでしょうか……、そうなることを願って、私は別冊第1号を読み始めました。

ちょっとした働きかけで……

作文指導の入門講座だったかと思えます。子どもたちの口頭詩を担当が書きとめておいて、それを学級の子どもたちに紹介しながら文章化していく

実践に出会いました。その後、私が一年生の担任になったときは、子どもたちの口頭詩を書きとめる作業に力を入れるようにしました。でも、40人の子どもたちの言葉をどれだけ聞き取るのができたかというところ、ごく一部を書きとめただけで、学級の子どもたち全員に響くような口頭詩を提示することができたなんてほとんどなかった……と反省ばかりです。

別冊第1号の1ページ目の口頭詩「しゅんすけ君のことば」は、感性を見抜いた先生が、一年生のときの家庭訪問で「ぜひ、ノートを一冊用意して、書きとめていってください。」とお母さんに働きかけて、文字化され、ノートに書き記されたもの。二年間で47編となりました。そして、その言葉を発した本人は忘れてしまっているのに、15年以上も過ぎて合唱団オリジナルの組曲としてよみがえったのです。

「しゅんすけ君のことば」は、聞き上手なお母さんと、書きとめられた口頭詩を喜んで読んでくれる先生に支えら

れて紡ぎ出されたものでした。ノートの欄外余白に「キラキラと輝くしゅんすけ君のことば……。」とか「このノートも二年目になりましたね……楽しんでいきます。」などの励ましのコメントを、忙しさの合間をぬって書いてあげる矢目先生のご苦労（力量）にも学ばなければなりません。ちょっとした父母への働きかけがこのような実践につながるということを、この別冊は教えてくれました。

## おらほの運動会

私が小さい子どもだったころ、祖母に手を引かれて兄や姉の運動会へ行くこと、生演奏のバックミュージックで競技する種目のときは、隣のおじいさんから知らないお姉さんまで、みんな声をからして応援する姿がありました。そして、お昼になると地域ごとに集まって楽しく過ごしたものです。昔の運動会は、実践記録の後半で、やはり運動会（学校）は「集いの場」なのだ」と

書かれているとおりのものでした。大津波の濁流に囲まれ、子ども・保護者とともに地域が崩壊していく様を見つめた日から169日目に行われた鳴瀬二中の運動会。震災で、あちこちに分散した地域の方々「集いの場」として集まってくれるかどうか……、間借り校舎での運動会は例年通りにはいかないと考え、制野先生はじっくり話し合うことから運動会の準備を進めました。

まず職員会議での話し合いでは、地域にこだわった提案をし、地域の方々の再開の場＝地域復興の第一歩であること、そして、将来この地域を支える人間として必要な力（村を捨てない学力）を身に付けさせたいと訴えました。いつもは、運動会の意味が問われることもなく内容が決まっていたようですが、地域の消滅……という状況下での運動会だったため、先生方も提案を真剣に受けとめてくれました。

次に運動会実行委員会での話し合い。議論を徹底的に行わせ、鳴瀬二中ならではの親子運動会のイメージを作っていました。「白馬に乗って、堂々と入場行進の先頭に行く」

「聖火リレーを行う」「鏡の光を集めて聖火へ採火する」「希望を乗せた紙ひこうきを飛ばす」等々……、だれでもわくわくするアイデアが出されました。最後まで心配だったことは、遠方に住む保護者や地域の方々賛同し、参

加してくれるかどうかということ。しかし当日は、感動の涙があららこちらに見られ、再会を喜び合うおばあさんたちの姿がありました。子どもたちの感想文からは、全員主体的に取り組んだことがうかがえます。運動会への意気込みが最後まで萎えなかったのは、準備段階での話し合いが大切にされ、合意形成が確立したからだと思います。

## 66号別冊を読んで②

# 「子どもものじりばに耳を傾けなくては」と考える

千葉 早苗

震災後は、遠方に行った人ほど再会の場を求めていますから、どんな運動会であっても参加者はそれなりに感動したことでしょう。それに加えて、制野先生は自治活動（話し合い）を通して地域的な課題をみんなのものにして、おらほ（地域）の運動会を実現させました。長雨で状態が悪い校庭に鳴瀬二中の砂を運び込み、先生たちみんなで

整備したことなどもおらほの運動会意識につながったと思います。「狼煙ととも」は、超多忙で複雑になった学校現場に、子どもたちの生活台としての地域を忘れないで……と警鐘を鳴らしているようです。

（元小学校教師）

があったんだよ……。」「今日〇〇ちゃんかね……。」ということが子どもの口から聞くことができたなら、親は子どもの学校生活を感じ取ることができます。そういえば1年生の担任をしていても、どうしても自分の話を聞いてほしくて私の机を取り囲み夢中で話し始める子どもが残念ながらもつきり少なくなりました。こちらから話しかけなければ一日一度も会話をしない子、学校から帰ったらどんな生活を送っているのか全くわからない子もいます。それは、忙しいを理由に子どもたちの話をしっかりと聞かなくなってしまう私にも原因があると思います。

別冊第1号の「しゅんすけ君のことば」を読んで思い出したこと、考えたこと、あらためて感じたことがありません。しゅんすけ君の口頭詩を読みながら新任3年目で担任した1年生の子どもたちのことを思い出しました。県北の小学校、単学級の1年生30人。当時作文サークルに通い始めたばかりの私はどうやって子どもに作文を書かせたらよいか悩んでいました。サークルで教えていただいたことは、「書かせるなんてまだ早い。いっぱいいっぱいしゃべらせて、一生懸命聞いてあげる。まずは、心の耕しから。」

一枚の紙に絵を描かせて「絵に描い

たことを先生にお話ししに来てね。」となげかけると子どもたちは、ざりがにをとったこと、じいちゃんの田植えを手伝ったこと、牛の世話をしたことなど話したいことが山ほどあり、45分で30人の話の聞き取りがいつも終わらなかつたのです。「先生、おれの話の続きあんだってば。」「先生、今度いつ絵とお話しやるの。」と子どもたち。

学校から帰ってお母さんに、その日見たことしたこと聞いたこと感じたことをありのままにそして素直に伝えるしゅんすけ君の姿は当時受けもつた1年生と重なります。しゅんすけ君のお母さんはきつと一生懸命話すしゅんす

け君をしつかりと受け止めて、丁寧に聞いてあげていたのでしょう。聞いてくれる人がいれば子どもは安心して話すことができます。分らないことだらけの新任時代でしたが、当時の私は少なくとも今よりは子どもの話に熱心に耳を傾けて、さらに話を引き出そうとしていたように思います。

毎年家庭訪問や個人面談で出る始めの話題は「先生、うちの子学校でどうでしょうか。学校の話の家でほとんどしないので是非教えてください。」「お友達とうまくやれていますか。」もちろん1年生でもです。家に帰らないや「おかあさん、学校で今日こういうこと

一人の親として教師として、しゅんすけ君の口頭詩を読み、あらためて子どもの言葉にしっかりと耳を傾けなくてはと感じました。学校の先生方はもちろんすべての家庭の保護者の方々も仕事に追われ、生活に追われ多忙な日々を送っています。しかし今も昔も子どもたちは新しく経験することや学ぶことに心がふるえ、そして誰かに伝えたいと思っています。そのとき親や教師が温かいまなざしで聞いてあげたり、共感してあげたりすることが、次の子どもの言葉につながっていくのだと思います。その繰り返し「心の耕し」なのだと、あらためて感じています。

（仙台市・長町南小学校）



# 宮城の体育実践

本書は、一九七〇年代から今日までの約四〇年間にわたって、宮城県内の教師と研究者が協力して、一つひとつ創り出してきた数多くの体育実践の記録の中から、最も典型的なもの二五本を選び出して編集したものである。その一つひとつに、研究者が、その実践のもつ意味や特質についてコメントを付けているのも特徴的である。

その内容は、幼児教育から小学校・中学校・高校、さらには少年院での実践にわたり、教材も、基本の運動・陸上競技・器械運動・球技・水泳・民舞と広汎におよんでいる。

それらの実践に共通に言えることは、教師がその教材の文化としての本質を問い直しながら、子どもたちと共に授業を通して探求しているということがある。そこでは、一人ひとりの子どもが学習の主体となり、しかも共同して探求していくように組織している点も共通している。

しかも、先人の生み出した実践の遺産に学びながら、さらに個性的に発展させていっている点も注目し値する。

サブタイトルに掲げられた二種の心の発明による典型の創造は、戦後のわが国の新たな教育学の基礎を築いた勝田守一（元東大教授・故人）の遺したメッセージから引用したものであるが、勝田は、その中で、教育実践の典型の創造にふれて、「芸術的創造と科学的創造との中間に位置し、両者の性質を共に備えることによつてしか、実は優れた実践を正しい理論的研究も成立しない、という特質を備えている。」とのべている。

テストの平均点を上げる対策へと向かう教育の趨勢の中で、授業というきわめて文化的ななみを通して、人格の形成をはかるとはどういうことか、改めて問い直す意味からも、ぜひ本書を手にとり、一読することをおすすめしたい。

発行所 宮城・体育の授業研究会  
定価 本体2,200円＋税  
問合せ みやぎ教育文化研究センター

## センターの動き

### 4月

4日 シンポジウム、5月26日に決める。田中孝彦さん来室。田中さん、戸倉のブックレットをたいへん高く評価。  
16日 10時から東北大で、今年度第1回の打ち合わせ会。2年目の計画を出し合う。ヤスパース学習会。  
17日 柴田民雄さん、佐藤九二さんの講演会のことに来室。

20日 体育の実践双書ででき上がる。これからつくるものへの刺激は大きいだらう。  
21日 雑誌「教育」を読む会例会。  
23日 午後、シンポジウムのチラシを「会員」全員に発送。

24日 宮教組の書棚と図書の移動。ほぼ一日かかる。  
26日 文科省助成申請の締め切り日。書類、宅急便に7時近くに入れて完了。  
27日 朝、文科省から不足書類があり、300字の概要末着との連絡。さっそくつづけて送る。午後、事務局会議。ホームページをやっててくれいている武田さん心筋梗塞で亡くなったとのこと。どうなるホームページは……。止まったまま。

### 5月

7日 連休終わる。つうしん67号のことを考える。  
11日 事務局会議。  
14日 ホームページは相変わらず動かない。  
15日 シンポジウムの個人宛案内を発送。

17日 印刷機のごことで会館と話す。ファクス、そして、プリンターも不調になってきたのだ。  
18日 2時からホームページ修復作業のため高橋さんと会って話し合う。なんとかなりそうで一安心。運営委員会を6月22日に決める。宮教組から事務局会への参加決まいる。現場を開けるのでたいへんありがたい。

19日 雑誌「教育」を読む会例会。  
21日 金環日食で大騒ぎ。熊谷賀世子さんのレポート入る。ヤスパース学習会。  
22日 午後雨に。太田貞子さんに電話し、別冊に綴り方指導の実践を使わせてもらう了解をえる。  
23日 3時から東北大でシンポジウムの打ち合せ。

25日 午後事務局会。「いま子どもたちは」をテーマのシンポジウムをもつことを提案。4時から、双書国語作成の下打ち合せ。  
26日 シンポジウム「震災を通して考える 地域と学校」参加80人。  
28日 田中さんたちと石巻行き。8時57分の仙石線で行き、松島海岸から矢本までバス。途中東松島の被災状況を車窓からみる。矢本に菊池さん、三浦さんが迎えてくれ、その後は車で石巻を歩く。昼食後菊池さんの話を聞き、3時40分のバスで帰る。

29日 バスで石巻。魚市場跡などを見て女川へ。女川の仮設住宅、石巻の2000世帯の仮設をみる。いろいろと考えさせられる。昨日につづいて菊池さんの話を聞く。昨日と同じバスで帰る。バスは往復とも補助椅子を使う状態。  
30日 シンポジウムに参加していただいた上杉連合町内会事務局長さんにお礼の電話を入れる。

### 6月

1日 10時から東北大で打ち合せ。  
4日 別冊2号の校正が入る。20ページに収めたいのだがずいぶん長い。  
5日 柴田民雄さんから佐藤九二さんの講演会の報告書が送られてくる。参加者100人近くは彼の努力だ。ホームページの修復作業のつづき。持ち主の委議手続きの要ありと。  
6日 戸倉小の斎藤さんに話を聞かせていただきたいひね依頼。  
8日 事務局会。  
11日 会館評議員会・理事会用報告書づくり。  
12日 会館評議員会・理事会。2時から戸倉の学校長に東北大で会い満さんと3人で話し合う。

13日 シンポジウムのテーマが熊谷さんによつて起こされたが、さてこれをどうつくるか。  
15日 シンポジウムの記録を通信用書き直しを始め。報告にならない報告で終わらそう。  
21日 ホームページ、やっと元に戻る。来週から動かせるか。

発行 (財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター 2012・6・29 発行責任者：春日辰夫  
〒981-0933 仙台市青葉区柏木 1-2-45 フォレスト仙台 5F  
http://www.mkbkc.com TEL 022-301-2403 FAX 022-290-4026

